吉村昭記念文学館 News

万年筆の旅 Vol.17

巻頭コラム

絵本・紙芝居「川尻浦久蔵」の制作について 瀬戸直子

CONTENTS

●令和２年度企画展開催報告　「吉村昭　医学小説―伝染病予防に奔走した人々―」
●トピック展示開催報告第13回「新収蔵資料展―自筆原稿大公開―」
●トピック展示開催報告第14回「吉村昭と太宰治賞～55年前の出発点～」
●イベント開催報告　「吉村昭関連映像上映会」

巻頭コラム　絵本・紙芝居「川尻浦久蔵」の制作について

瀬戸直子

私の住む広島県呉市川尻町は、吉村先生の著書『花渡る海』の主人公・久蔵（きゅうぞう）の生まれ故郷だ。船の遭難でロシアに流され種痘苗を日本に初めて持ち帰ったという久蔵の物語と深く向き合ったのは今から20年近く前のことだ。

平成の大合併で川尻町が呉市との合併を目前にしていた頃、私の子どもたちの通う川尻小学校は創立１３０周年の大きな節目を迎えた。当時ＰＴＡ役員だった私は、創立記念行事で絵本の読み語りを担当することになった。しかしいざとなると適当な絵本は見つからず、川尻出身の偉人である久蔵の存在は知っていたが、子ども向けの絵本はない。頭を抱えていると、当時の校長先生が「じゃあ作ればいいんじゃない？」とおっしゃったのだ。

一体誰にそんな事ができるだろう。私が途方に暮れていたところ、『花渡る海』を紹介してくれたＰＴＡ仲間の森川さんが絵本の文章作成を引き受けてくれ、作画は同じくＰＴＡの湊さんにお願いできる事になった。しかし、この厚い本を短い文にするのは予想以上の大仕事だった。ある日とうとう行き詰まり、再び校長先生に相談すると、「これじゃあ低学年はもたないよ」と文章をバッサバッサと切って下さった。それでふっ切れたのか、森川さんはその後驚くべき大胆さで文を短く編集し、湊さんも図書館で昔の船などの資料を求め、ものすごい想像力で作画を進めていった。

絵本作りにとりかかる前に許可をいただけるかお伺いして以降、吉村先生とは折に触れてご連絡をとらせていただいていた。でき上がった絵と文を緊張しながら吉村先生にお送りすると、「絵も文も良い。感心しました」と、とても喜んで下さった。

生演奏と地元の紙芝居会の方による創立記念日当日の読み語りは大成功で、低学年の小さな子どもたちも、会場に来た地元の方々も、食い入るようにお話に聞き入ってくれた。その後、せっかくの絵と文をこの一日で終わらせたくないと、読み語りの内容を絵本や紙芝居に残す新たなプロジェクトが始まる。本など作ったことのない者ばかりが悪戦苦闘する間にも、吉村先生に何度かお手紙で質問や現状の報告をさせていただいたが、いつもすぐにお返事をいただき、その暖かい励ましのお言葉に前に進む力を得たものだ。

中でも印象に残っているのは、『花渡る海』で久蔵が誰よりも早く日本に種痘苗を持ち帰った事を、三宅春齢が「補憾録」という医学書の付則に加えたとされており、その付則のある古書を探したが見つからなかった時である。先生にお尋ねすると「広島で取材した際に目にしたのだから必ずあるはずです」と、参考になるコピーなど添えて送って下さった。慣れない作業にくじけそうになる私にはどんなに大きな励みになったかわからない。

資金の乏しいＰＴＡには絵本の制作費用はない。皆で知恵を絞り、「絵本ができたらお届けします」と、１口２０００円の協力金を町内や校内で募った。今でいうクラウドファンディングだ。こうして多くの方々の協力で絵本や紙芝居が完成し、できたてのほやほやの絵本をお送りすると、吉村先生はことの外喜んで下さった。「これで久蔵は故郷で蘇りました」との過分のお言葉に、私たちは涙した。

５年後、その時の資金で光明寺の久蔵の墓のそばに石碑を建て、再度小学校で生演奏と読み語りが行われた。創立記念日に1年生だった子は6年生になっていた。

その時には残念ながら吉村先生は他界されていたが、奥様の津村先生に広島の地酒と牡蠣をお送りすると、「吉村の好きだった牡蠣フライにして写真に供えました」というお礼のハガキをいただいた。吉村先生も津村先生も高名な作家でいらっしゃるのに、何と謙虚でおられることかと心から感動したことだ。

この度「吉村昭　医学小説―伝染病予防に奔走した人々―」の企画展に久蔵の絵本や紙芝居、ＤＶＤまで紹介していただいた事は、久蔵と同じ地に生きる者としてこれ以上ない喜びであり光栄なことだ。もしかしたら一番喜んでいるのは久蔵かもしれない。

これからも久蔵の話を子どもたちに伝え続けて行きたいとしみじみ思っている。

（せとなおこ・元川尻小学校ＰＴＡ、絵本「川尻浦久蔵」編集者）

令和2年度 企画展開催報告
「吉村昭　医学小説―伝染病予防に奔走した人々―」

会期：令和3年3月24日(水)～
6月30日(水)
(臨時休館：4月28日～5月18日)
場所：ゆいの森あらかわ　3階
企画展示室

この度の企画展は、新型コロナウィルス感染拡大の影響を受け、会期を当初の5月23日から約一か月延長して開催しました。

⬅企画展特設サイト
https://www.yoshimurabungakukan.city.arakawa.tokyo.jp/igaku2021/

企画展示室
入口の様子

吉村は自身の闘病体験をもとに生涯「死とはなにか、生とはなにか」を主題に作品を書き続けました。自らの闘病体験を振り返り、患者の立場で取材や調査をし、心臓移植について描いた「神々の沈黙」を発表以降たくさんの医学に関する小説を執筆します。展示では「雪の花」「北天の星」「破船」「花渡る海」など、コロナ禍においても注目を集めた天然痘に関する作品を取り上げ、特にその予防に携わった人物に焦点を当てて紹介しました。

医学小説を書いたきっかけとなった結核闘病時代の日記やスケッチなどをはじめ、種痘について書かれたメモなどの自筆資料をご覧いただきました。特に、天然痘予防のために使用された種痘道具(国立科学博物館蔵)の前では、多くのお客様が足を止めて下さいました。

また、執筆に際し参考にした旧書斎資料の中から、付箋があるものや人物や土地などを中心に書き込みがあるものを取り上げて、吉村がどのように資料に対峙していたのかを感じていただきました。

「花渡る海」の主人公の久蔵を紹介する章では、故郷である川尻(現広島県呉市川尻町)で制作された「川尻浦久蔵」の絵本、紙芝居とともに、挿絵に使用された湊里香氏の原画を展示しました。同時に、展示室内において読み聞かせ用の動画を放映しました。

展示を見たお客様からは、「吉村の息吹を感じます」「小説の情景が目に浮かんだ」などのお声をいただきました。

コロナ禍で外出が困難な中、ご自宅などでも展示を一部ご覧いただける取り組みとして、今回の企画展でもウェブ特設サイトを作成しました。読み聞かせ動画もサイトでご覧いただけます。サイトは会期終了後も公開しておりますので、是非ご活用ください。

(学芸員　北山ゆかり)

「川尻浦久蔵」絵本2冊と紙芝居
平成16年制作。左の絵本は同17年に作られた低・中学年向けのもの。

学芸員ノート4

ワクチンと牛痘種痘

新型コロナウィルス感染症の影響でより身近な言葉となった「ワクチン」ですが、企画展で取り上げた天然痘と関係の深い言葉でもあります。英語で「ワクチン」は〝vaccine〟と表記され、ラテン語の牝牛を意味する〝vacca〟に由来する言葉です。これは展示でも紹介したイギリスの医師ジェンナー(1749～1823)が牛痘種痘を成功させたことにちなみ名づけられたものです。

企画展のグッズとして制作したマスキングテープも牛痘種痘から着想を得て牛をイメージして製作しています。展示とゆかりの深い地域が牛の柄の中に潜んでいます。是非一度お手に取ってご覧ください。

(左) 図録 (370円〈税込み〉◎B5・48頁・オールカラー)
(右) 展覧会オリジナルグッズ「マスキングテープ」(300円〈税込み〉)
※ゆいの森1階総合カウンターまたは郵送販売。詳しくは展示サイトをご確認ください。

「新収蔵資料展―自筆原稿大公開―」

会期：令和3年3月19日(金)～6月16日(水)

令和元年度から2年度にかけて新たに収蔵した自筆原稿を紹介するトピック展示を開催しました。原稿は短篇が1作品、随筆が4作品で、短篇は平成5年(1993年)に雑誌「文藝」に発表した「遠い星」(後改題「青い星」)という吉村の五兄敬吾の戦死をモチーフにした作品です。今回、草稿と清書原稿が一式揃った状態で受け入れることができたため、展示では両者を並べて紹介し、その推敲跡をご覧いただきました。随筆は、昭和40年代後半から同60年に書かれたもので、友人や家族との思い出、下積み時代のエピソードや死生観を綴ったものなど、幅広い題材の作品を収集・公開することができました。

新収蔵した自筆原稿

●遠い星(後改題「青い星」「文藝」平成5年秋季号、『遠い幻影』所収) ●愚かな父と愚かな母(「レジャーと経営」昭和47年6月号、『月夜の記憶』所収) ●囲碁とオーバー(「レジャーと経営」昭和47年9月号、『蟹の縦ばい』所収) ●行列(「海」昭和49年2月号、『白い遠景』所収) ●私の転機(「朝日新聞」夕刊 昭和60年5月28日、『旅行鞄のなか』所収)

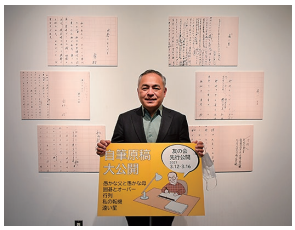
友の会限定イベント「自筆原稿先行公開」開催報告

会期：令和3年3月12日(金)～3月16日(火) 各日2回

今回、トピック展示に関連して、友の会会員向けに自筆原稿を先行して公開するイベントを開催しました。一般公開では、常設展示室の一角を利用するため、限られた点数しかご紹介することができませんが、限定イベントでは、企画展示室を使用して、原稿用紙の全ページをご覧いただきました。イベントにご参加された皆さまからは、「文章だけでなく、文字からも作家魂を感じました」「〝下書き〟があれほど細かい字で書かれていたのはびっくりした」などのご感想をいただき、吉村の特徴でもある細字で書かれた下書きや自筆の持つ迫力を味わっているご様子でした。

(学芸員 鈴木志乃)

友の会限定イベントのようす



ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました!!!

「吉村昭と太宰治賞～55年前の出発点～」

会期：令和3年6月18日(金)
～9月15日(水)

吉村昭は、昭和41年(1966年)に「星への旅」で第2回太宰治賞を受賞して文壇デビューを果たしました。今年は、デビューから55年の節目の年にあたります。これを記念して、太宰治賞や受賞作「星への旅」を紹介するトピック展示を開催しました。ここでは受賞当時のエピソードを振り返ります。

この太宰治賞の発表式が、ちょうど太宰治の命日と言われる六月十九日、つまり桜桃忌に、三鷹の禅林寺の庫裏みたいなところでありました。(中略)二百人ぐらい桜桃忌に集まった人がいまして、私は太宰治賞の最初の受賞者ということで発表されました。そしてこれが、私の一つの文学的な出発ともなったのです。

『わが心の小説家たち』
(平成11年 平凡社新書)

吉村は、昭和28年に学習院大学を中退後、会社に勤めながら同人雑誌を中心に執筆活動を続けていました。昭和34年に「鉄橋」と「貝殻」が芥川賞候補に選ばれ、さらに同37年にも「透明標本」と「石の微笑」が相次いで候補となりますが、いずれも受賞には至りませんでした。昭和40年、妻で作家の津村節子が、「玩具」で芥川賞を受賞します。これをきっかけに、吉村は勤めていた会社を辞めて執筆に専念しますが、思うように作品が書けず、友人から勧められた岩手県の田野畑村に一人、旅に出ます。この旅で創作意欲を取り戻し、この地を舞台にした「星への旅」で、第2回太宰治賞を受賞しました。

「星への旅」は、若者の集団自殺を描いた作品です。実際に大阪であった小学生の家出自殺事件と、昭和12年に起きた宗教団体の「死のう団事件」に着想のヒントを得ています。吉村はそれらを現代社会における集団自殺として描きたいと考えていました。そして、旅で訪れた田野畑村の鵜の巣断崖で「屹立した断崖とその下に動く濃紺の海の色」を目にした時に構想が広がり、この作品を書き上げました。

この作品は、もともと文藝春秋新社の「文學界」から依頼を受けて書いた作品でしたが、掲載にあたり、約80枚あった原稿用紙を20枚ほど削るようにと言われます。それにはかなりの改作を要するため掲載を断念して、代わりに、雑誌「展望」で募集していた太宰賞に応募しました。

太宰賞は、昭和40年に筑摩書房が「展望」の復刊記念に設けた新人賞で、同年の第1回目は該当者がなく、第2回目の吉村が最初の受賞者となりました。2回目の応募作品は496篇あり、40篇が第一次予選を通過、さらに5篇が最終選考に残り、「星への旅」が選ばれました。

太宰賞でデビューを果たした吉村でしたが、デビューと言っても芥川賞候補に4度も選ばれ、すでに単行本も3冊出版しており、さらに丹羽文雄が主宰する同人雑誌「文学者」でも編集委員を務めていたため、文壇ではかなり名前が知られていました。この受賞によって、これまでコツコツと同人雑誌で小説を書き続けてきた努力がようやく実を結び、まさに「一つの文学的な出発」を迎える契機となったのでした。

受賞の知らせを受けた吉村は「学生時代、結核で寝ていたころ、太宰さんの作品を愛読しました。これからは太宰賞の名前をはずかしめないよう、自分で満足のできる作品を書きつづけていきたい」と決意を語っています(「サンケイ新聞」夕刊 昭和41年6月23日)。

受賞から2か月後、「星への旅」は、芥川賞候補作の「石の微笑」や「鷺」「煉瓦塀」「少女架刑」とともに短篇集として、筑摩書房から刊行されました。

今回の展示では、太宰治に関連して、日本近代文学館が所蔵する自筆原稿「人間失格」を期間限定で展示しました。吉村が『わが心の小説家たち』(平成11年、平凡社新書)で「太宰治の代表作はやはり『人間失格』、これに尽きるのではないか」と述べていることから展示する運びとなりました。展示期間中は夏休みということもあり、幅広い世代の方々にご来館いただきました。

(学芸員　鈴木志乃)

太宰治自筆原稿「人間失格」
(日本近代文学館蔵)
※4冊ある原稿のうち、第1・2・4巻を展示

吉村昭関連映像上映会開催報告
第1部「新テレビ私の履歴書　吉村昭」
第2部「青春の昭和史(Ⅰ)遠い日の戦争」

日時：令和3年7月6日(火)、8日(木)、11日(日)　14時～16時30分
場所：ゆいの森あらかわ　ゆいの森ホール

新型コロナウィルス感染症対策を行いながら上映会を開催しました。

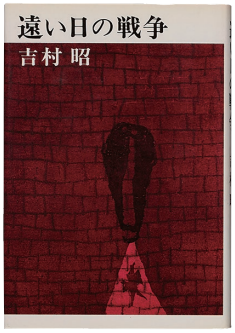
第1部は、日本経済新聞紙上で連載され、テレビ版として昭和62年(1987年)よりテレビ東京で放送された「テレビ・私の履歴書」シリーズです。平成2年(1990年)11月、吉村が63歳の時に出演した番組で、北海道での取材風景や津村節子氏とのインタビューの様子などが収められています。

【写真1】上映会当日の様子

第2部は昭和54年9月3日、テレビ朝日で放送されたドラマ番組で、吉村昭原作「遠い日の戦争」(出演：二谷英明、小林薫ほか)です。父が戦犯だったことを知り家を飛び出した息子と、後を追う父。親子のつながりを通して、それぞれの戦後を問いかけていきます。

友の会会員の方を中心に、若い世代の方にもご参加いただきました。参加者の方からは「吉村さんの穏やかな表情が印象的でした」、「吉村氏の細部にこだわる人格がよくわかりました」、「著作では知り得ない一面を知りました」などの感想をいただきました。

著作紹介
『遠い日の戦争』



『遠い日の戦争』
(昭和53年 新潮社)

・執筆の動機

「遠い日の戦争」は、吉村自らの空襲体験を根底にして描かれた作品です。昭和20年4月、B29の投下した焼夷弾を浴び、住んでいた東京・日暮里町付近は焦土と化します。その折に、B29から脱出降下した飛行士たちが住民に捕えられたという話を聞き、吉村はその後の飛行士たちの行く末がずっと頭から離れませんでした。戦後、B級戦犯の記録に眼を通すうちに、戦争末期に九州・福岡市でB29の搭乗員を処刑した事実を知り、戦中に見たB29の情景と相まって、処刑とその執行者の心情を小説に書きたい、と思ったことが動機となりました。

執筆にあたり2人の元陸軍将校である処刑者に会い、話を聞き、その2人の体験を「清原琢也」という主人公に凝縮させて小説を完成しました。

・潜伏者のおびえを描く

その男は、B29搭乗員として多くの日本人を殺傷したが、思い返してみると殺人者の印象は感じられなかったし、犯罪者らしい表情もみられなかった。(中略)琢也がかれを斬首したのも、かれの行為と同じように、軍人としての義務を忠実に果したに過ぎなかった。ただ、かれと異っているのは、かれが爆撃という直接眼にできぬ手段によって殺人をおかしたのにくらべて、琢也の場合は自ら手にした軍刀でかれの首を刎ねたということであった。琢也の慰めは、かれが無数の日本人を殺したのに、自分はかれ一人を殺したにすぎないという事実であった。

・「戦争というものの奇怪さ」を表現

琢也は、手紙を破り捨てた。戦争犠牲者という言葉が流行語のように使われていることは知っていたが、少くとも自分には縁遠いものに感じられた。かれは弟に、自分はそのような範疇に入るような男ではなく、あくまでもアメリカ人の首を刎ねた一人の男だ、と書き送った。逃亡中に読んだ新聞に、戦犯は憎みても余りある暴力の野獣だと書かれていたが、それから七、八年しかたたぬのに、単純に考え方を変える人間に堪えがたい嫌悪をいだき、それを朗報であるかのように伝えてきた弟にも腹立たしさを感じた。

(『遠い日の戦争』昭和53年 新潮社)

終戦の日を境に、自分を含めた庶民というものが、戦時中と戦後で、驚くほどの変身を遂げたことに戸惑いを感じます。その「二つの相反した精神的季節」の中を生きた「人間の持つ驚くほどの順応性」というものが、戦争から得た吉村の「悲しい発見」でした。

(学芸員　篠田敦子)

“友の会”入会お待ちしています！

吉村昭記念文学館では、友の会会員の入会・更新を随時募集しています。
会員になると限定グッズやイベント優先募集等の特典があります！

【会員区分】

個人会員(1年)	1000円
個人会員(3年)	2500円
法人会員	3000円
賛助会員	一口2000円から

皆さまのお申込み心よりお待ちしております。

津村節子氏の記念碑建立

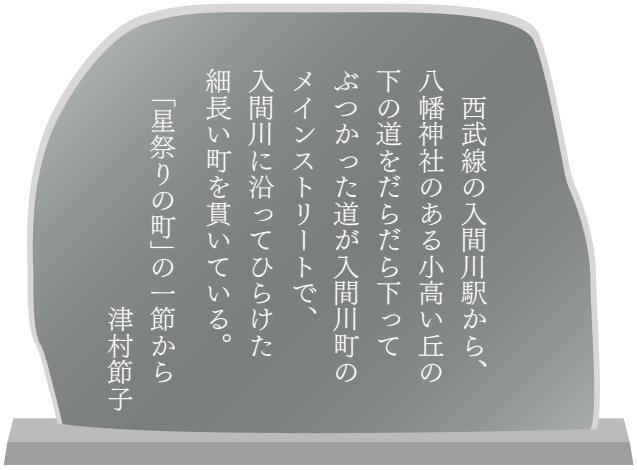
令和3年(2021年)4月3日、埼玉県狭山市入間川の八幡神社境内に津村節子氏の記念碑が建立されました。

入間川は津村氏の母親の生地で、戦争が激しくなった昭和19年(1944年)に祖母や姉妹とともに生まれ育った福井県から疎開し、結婚するまでの8年余りを過ごしました。入間川を舞台にした『星祭りの町』(平成8年、新潮社)は、当時の日々を描いた自伝的小説で、記念碑には『星祭りの町』の一節が刻まれています。

左から4人目が津村氏、その隣が吉村司氏（写真提供 狭山市）

石碑の建立は、狭山市の有志が長年津村氏に打診し、令和2年11月に承諾を得て実行委員会形式で進められました。高さは台座を入れて約1・1m、幅約1・35mあり、表には『星祭りの町』の引用文が、裏には津村氏のプロフィールが刻まれています。4月3日に行われた除幕式には、津村氏やご子息の吉村司氏、そして実行委員会の方々が出席し、その完成を祝いました。

『星祭りの町』
（平成8年 新潮社）



お知らせ おしどり文学館協定　荒川区・福井県合同展示

平成29年11月5日に、吉村昭記念文学館と福井県ふるさと文学館は、「おしどり文学館協定」を締結しました。この協定は、吉村昭と福井県出身の作家、津村節子氏の「おしどり夫婦」になぞらえて締結したものです。今年度も、おしどり文学館協定に基づき、荒川区・福井県合同展示を開催します。

＊おしどり文学館協定締結の経緯について、詳しくは「万年筆の旅」vol.10で紹介しています。

吉村昭記念文学館　第15回トピック展示「津村節子「花がたみ」―越前和紙の魅力―」

- ●会　期　令和3年9月17日(金)～同年12月15日(水)。午前9時30分から午後8時30分まで。
- ●休館日　10月21日(木)、11月18日(木)、12月3日(金)
  ※新型コロナウィルス感染拡大状況により、開催日時等を変更する場合があります。
- ●場　所　吉村昭記念文学館 2階 著作閲覧コーナー
- ●内　容　福井県で紙漉き業を営む家に生まれた少女を主人公にした作品であり、福井ふるさと五部作の1つでもある津村節子氏の「花がたみ」を紹介します。また、津村、吉村両氏が取材時に愛用した、肩書のない越前和紙製の名刺も展示します。

福井県ふるさと文学館　特集展示「吉村昭と天狗党」

- ●会　期　令和3年10月1日(金)～同年12月22日(水)。平日は午前9時から午後7時まで。土日祝日は午前9時から午後6時まで。
- ●休館日　毎週月曜(休日の場合は翌日)。祝日の翌日。
- ●場　所　福井県ふるさと文学館　文学の小路
- ●内　容　敦賀で非業の最期を遂げた天狗党を描いた吉村昭の『天狗争乱』を紹介します。『天狗争乱』の自筆原稿(複製)や、武田耕雲斎遺留日本地図パネルなどを展示します。

ふるさと風花文庫のご案内

ゆいの森あらかわ3階企画展示室前の福井県コーナーに、昨年度ご好評いただいた「ふるさと風花文庫」を今年度も排架しています。福井県ふるさと文学館よりお借りした図書110冊です。郷土の作家や芥川賞・直木賞の受賞作など、5つのテーマでまとめられています。ご利用は館内閲覧のみです。是非ご来館の際にはお立ち寄りください。期間：令和4年3月31日まで。

企画展のお知らせ
吉村昭と東日本大震災～未来へ伝えたい、災害の記録と人びとの声～

令和3年10月16日(土)～12月15日(水)

平成23年(2011年)3月11日の東日本大震災発生時、吉村昭の著作『三陸海岸大津波』(平成16年 文春文庫)と『関東大震災』(昭和48年 文藝春秋)は広く再読されました。それから10年を経た今、改めてこの2作を中心とする資料を取り上げます。取材ノートや執筆時の参考文献、初公開となる旧蔵書を展示するほか、津村節子『三陸の海』(平成25年 講談社)をはじめ、吉村作品を踏まえた作家たちの作品や、吉村・津村夫妻とゆかりの深い三陸沿岸の地から届いたメッセージや資料を紹介します。

展示図録

- B5判48ページ　オールカラー　420円(税込)　取材ノートほか、初公開資料も掲載。
- 特別寄稿／吉村司氏(吉村昭・津村節子氏長男)、赤江珠緒氏(フリーアナウンサー･ラジオパーソナリティ)、荒谷栄子氏(宮古市教育委員)、大島幹雄氏(ノンフィクション作家・石巻若宮丸漂流民の会事務局長)、佐伯一麦氏(小説家)、将基面誠氏(元田野畑村村医)、鈴木るりか氏(高校生作家)、村田朋泰氏(アニメーション作家)、森健氏(ジャーナリスト)、ヤマザキマリ氏(漫画家・随筆家)
- メッセージ／菊池のどか氏(株式会社8kurasu防災教育推進担当)
- 販売場所／ゆいの森あらかわ1階総合カウンター、郵送販売。詳しくはお問い合わせください。

関連イベント

1 映像配信　朗読とトーク　～赤江珠緒が読む、吉村昭～

吉村作品を愛読する赤江珠緒氏による朗読です。吉村作品の魅力や自然災害への思いも語っていただきます。

- 出演：赤江珠緒氏
  (フリーアナウンサー・ラジオパーソナリティ)

赤江珠緒氏

/荒川区公式チャンネル

- 朗読作品：吉村昭『三陸海岸大津波』より。
  「梅の蕾」(『遠い幻影』)より。
  ユーチューブで常時配信！

2 館内上映　村田朋泰　人形アニメーションの世界

生まれ育った荒川区で創作活動を続け、吉村昭の影響を最も受けたと語る村田朋泰氏(アニメーション作家)。東日本大震災を機に構想された作品や、お子様も楽しめるアニメーションを上映します。

- 上映作品：「松が枝を結び」「木ノ花ノ咲クヤ森」「家族デッキ」
  NHKプチプチ・アニメ「森のレシオ」ほか。
- 場所：1階エントランス　3階企画展示室前

- 開館時間／9時30分～20時30分
  休 館 日／10月21日(木)、11月18日(木)、12月3日(金)
  入 館 料／無料　　会場／3階　企画展示室
  新型コロナウィルス感染拡大状況等により、開催日時を変更する可能性があります。

企画展公式サイト

Vol.17 今号の表紙

津村節子氏蔵

表紙写真は、25年前の平成8年(1996年)10月に北海道の利尻島、姫沼で撮影されたものです。紅葉する木々の奥に見えるのは、利尻富士とも呼ばれる利尻山で、右端に69歳の吉村の姿があります。この年、利尻島に上陸したラナルド・マクドナルドを主人公にした『海の祭礼』(昭和61年 文藝春秋)の文学碑が建てられ、除幕式のため島を訪れました。

編集後記

新型コロナウィルスの影響で従来のイベントが開催できない状況で、今年の３月に少人数で実施した友の会限定イベント「自筆原稿先行公開」は、会員の皆さまが展示資料をじっくりとご覧になる姿や、読んだ作品のご感想を楽しそうにお話しくださる表情に直接触れる機会となり、コロナ禍で様々なイベントを見送ってきた我々にとって大きな励みとなる瞬間でした。

今年度は秋の企画展「吉村昭と東日本大震災」に続き、冬には没後15年に際した企画展も予定しております。油断できない状況が続きますが、感染防止対策をしっかりと講じながら皆さまのご来館を心よりお待ちしております。

吉村昭記念文学館ニュース
万年筆の旅 vol.17

令和3年10月14日発行

■ 編集・発行/荒川区　登録番号(03) 0045号
■ 問合せ/吉村昭記念文学館
〒116-0002　東京都荒川区荒川2-50-1ゆいの森あらかわ内
TEL ：03-3891-4349
FAX：03-3802-4350
URL：https://www.yoshimurabungakukan.city.arakawa.tokyo.jp/
【開館時間】9時30分～20時30分　【入館料】無料
【休館日】毎月第3木曜日・特別整理期間・保守点検日・年末年始他

アクセス
- 都電荒川線(東京さくらトラム)「荒川二丁目(ゆいの森あらかわ前)」下車 … 徒歩1分
- 東京メトロ千代田線「町屋駅」2番出口、京成線「町屋駅」下車 …… 徒歩8分
- コミュニティバス「さくら」ゆいの森あらかわ下車(土曜、日曜、祝日のみ)
- 東京駅から(地下連絡通路経由)東京メトロ千代田線「大手町駅」→「町屋駅」(乗車13分)